

## 使徒の働き10章34－35節 「壁を崩される神」

### 1A えこひいきをされない神 34

#### 1B 異邦人と交わらないユダヤ人 28

##### 1C 食物規定

##### 2C 雑婚の拒否

##### 3C ユダヤ民族の優位性

##### 4C 自動的な救い

#### 2B 御声を聞く民

##### 1C 信仰の原則

##### 2C 心の清め(割礼)

##### 3C 悔い改めによる救い

#### 3B 差別なき救いと一致

### 2A 受け入れる神 35

#### 1B 壁を作る人間

##### 1C 神との交わりのための戒め

##### 2C 自分の守りのための枠組み

#### 2B 壁を壊されたイエス

#### 3B 神への恐れ、義の行い

## 本文

使徒の働き 10 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは 9 章まで来ました。今日は 10 章を、午後礼拝で一節ずつ学びます。今朝は、10 章 34-35 節に注目します。「<sup>34</sup>そこで、ペテロは口を開いてこう言った。「これで私は、はっきり分かりました。神はえこひいきをする方ではなく、<sup>35</sup>どこの国の人であっても、神を恐れ、正義を行う人は、神に受け入れられます。」

使徒の働きの中で、教会の代表的な指導者であるペテロが、異邦人がイエス様の名を信じて、聖霊のバプテスマを受け、確かに神の国に入ることを知らされるという、大きな出来事が 10 章に書かれています。カイサリアにいるローマの百人隊長コルネリウスは、ユダヤ教に改宗していないものの、イスラエルの神を敬い、祈り、ユダヤ人に寄付をしていました。御使いが彼に現れて、自分の家にペテロを招きなさいと命じます。ペテロは、ヤッファで幻を見ました。天からの風呂敷なのですが、そこにユダヤ人の食べない、汚れているとされる動物があり、「屠って食べなさい」と言われますが、「いいえ、主よ、食べません。」と答えます。これが三度起こりました。その時に、コルネリウスから遣わされた者たちがやってきました。ペテロは御霊に、彼らについて行くように言われます。そして、コルネリウス一家はペテロの一行を迎えました。ユダヤ人が異邦人の家に入ること

も、食事をすることもありませんでしたが、ペテロはそれらのしきたりを全て破って入ったのです。けれども、今、天からの風呂敷のことは、神からの啓示で、神が異邦人を清められたのだということを表していたことに気づきました。それで、この言葉を言ったのです。「**これで私は、はっきり分かりました。**」と言っています。神は、ユダヤ人だけに関わっておられたのではなく、その壁が崩れて、異邦人にも救いをもたらしておられることを気づいたのです。

壁が壊れるということは、画期的なことです。先週は、アメリカのホワイトハウスで、イスラエルとUAE、イスラエルとバーレーンが国交を結びました。1948年の第一次中東戦争以来、アラブ諸国とイスラエルには大きな壁がありました。アラブの国に行っても、イスラエルという国自体が地図にありませんでした。イスラエルに渡航履歴があれば、入国を禁じられていました。スポーツで、柔道でイスラエル人選手がアラブ人の選手と戦い、終わった時にイスラエル人の選手が握手を求めたら、それを拒否したのです。日本の企業も長いこと、イスラエルと付き合いとアラブ諸国が自分の会社の製品をボイコットするので、イスラエルから距離を取っていました。しかし今、その枠組み、双方の間にある壁が崩れたのです。平和が訪れるのは容易なことではないですが、しかし、現にその壁が崩れることがあるのです。

#### 1A えこひいきをされない神 34

ペテロは、「**神はえこひいきをする方ではなく**」と言っています。これは、その通りです。旧約聖書から何度となく、神はえこひいきをしない方であることを教えています。「申 10:17 **あなたがたの神、【主】は神の神、主の主、偉大で力があり、恐ろしい神。えこひいきをせず、賄賂を取らず、**」パウロは、神はえこひいきする方でないから、ユダヤ人も異邦人も同じように報いを受けることを語っています。「ロマ 2:9-11 **悪を行うすべての者の上には、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、苦難と苦悩が下り、善を行うすべての者には、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、栄光と誉れと平和が与えられます。神にはえこひいきがないからです。**」

#### 1B 異邦人と交わらないユダヤ人 28

このように、えこひいきがないと教えているのに、それでもユダヤ人は自分たちだけが救われて、神の国に入るけれども、異邦人はそうではないと考えていました。あるラビは、異邦人は地獄の火を燃え続けさせるための燃料ぐらいにしか考えていませんでした。その壁は徹底しており、ペテロはコルネリウスや他の人たちに、こう話しています。28節です、「**ご存じのとおり、ユダヤ人には、外国人と交わったり、外国人を訪問することは許されていません。**」訪問することさえ行かないように戒められていたのです。パリサイ人に至っては、自分の衣が通りがかりで、異邦人に触れることのないように、腕で抑えていたそうです。

#### 1C 食物規定

なぜ、そんなことまでになってしまったのでしょうか？ペテロは、幻の中で風呂敷にある動物を見

て、反射的に、「10:14 私はまだ一度も、きよくない物や汚れた物を食べたことはありません。」とまで言っていますが、イスラエル人に神は、清い動物と汚れた動物を区別されました。レビ記 11 章にあります。例えば、反芻する家畜はきよいが、そうでないのは汚れている。ですから、豚は汚れています。魚では、ひれやうろこがあるものは食べてよいが、なければ汚れている、というものです。これらのことを行うのは、「レビ 11:44 あなたがたは自分の身を聖別して、聖なる者とならなければならない。」とあり、イスラエル人がこの規定を守ることによって、自分たちが神の命令に従う民であり、神に別たれた聖なる民なのだということを知らせました。

## 2C 雑婚の拒否

また、イスラエルの民が異邦人と結婚することも禁じられていました。「申 7:3 また、彼らと姻戚関係に入ってはならない。あなたの娘をその息子に嫁がせたり、その娘をあなたの息子の妻としたりしてはならない。」偶像を家に取り入れて、偶像礼拝をすることのないように、結婚することも戒められていました。

## 3C ユダヤ民族の優位性

このようにして、食事は共にしない、異邦人との結婚もしないということで、自分たちは異邦人とはかなりの部分で付き合い合わないこととなります。そうやって枠組みを決めてしまっているうちに、ユダヤ人たちは、自分の民族が優れていると思うようになりました。イエス様が、「真理があなたがたを自由にします。」と言われた時に、「ヨハ 8:33 私たちはアブラハムの子孫であって、今までだれの奴隷になったこともありません。」と述べています。自分たちがエジプトの奴隷状態にあったのをすっかり忘れて、そんなことを言っているのですが、自分たちのありのままの姿を見ることが出来なくなりました。

## 4C 自動的な救い

そして、「ユダヤ人に生まれてさえすれば、そのまま天の御国に行く。」と思うようになります。ユダヤ人は自動的に御国に入ると思いました。そのことに、バプテスマのヨハネが、厳しい言葉を残します。「ルカ 3:8-9 それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。『われわれの父はアブラハムだ』という考えを起すことはいけません。言っておきますが、神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子らを起すことができるのです。斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木はすべて切り倒されて、火に投げ込まれます。」私たちキリスト者も、同じ過ちに陥るかもしれません。バプテスマを受けた、教会に属している。あるいは、あの時に信仰告白をした。だから、自動的に私は天国に行けると思ってしまうのです。

## 2B 御声を聞く民

### 1C 信仰の原則

確かに、神はユダヤ民族をご自分の民として選ばれました。けれども、その大前提として、人が

神に言われることに聞いている、神の声を聞いて、それを信じ受け入れて、従っている。こういった生きた、人格的な関係のために、選びが選びですね。「申 7:7-8 【主】があなたがたを慕い、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実あなたがたは、あらゆる民のうちで最も数が少なかった。しかし、【主】があなたがたを愛されたから、またあなたがたの父祖たちに誓った誓いを守られたから、【主】は力強い御手をもってあなたがたを導き出し、奴隷の家から、エジプトの王ファラオの手からあなたを贖い出されたのである。」自分がどんなにみすぼらしくても、弱くても、いや神に反抗していても、それでも一方的に愛しているという、神の憐れみに満ちた愛が、その愛があって選んでいるんですね。

このように、神の豊かな憐れみを個人的に、人格的に知って、その愛に応答するという信仰こそが本質であって、そこにはユダヤ人や異邦人という民族の違いはないのです。ヘブル人への手紙には、信仰によって生きた人々の話が出ています。天地創造の始まりから、アベルとカイン、エノク、ノア、そしてアブラハム。イサクとヤコブ、そしてモーセ。ヨシュアのことも書かれているし、その後も、神に用いられた一人一人の名前を列挙して、すべてが信仰によって行動したことを書いています。「ヘブル 11:6 信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神がご自分を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならないのです。」

### 2C 心の清め(割礼)

ところで、ペテロがこのようにしてコルネリウスと会ってしばらく経ってから、エルサレムで大きな論争が起こりました。異邦人が異邦人としてそのままの姿で救われることができるのか？ということです。ユダヤ教では、異邦人は割礼を始めとする律法を守ることによって、宗教的にユダヤ人になることによって初めて救われると信じていました。イエスを信じるユダヤ人の中に、異邦人でイエスを信じた人々も、割礼を受けなければならない、律法を守らなければならないと主張したので、それで激しい論争になったのです。そこでペテロが立ち上がりました。15 章です。「15:7b-9 兄弟たち。ご存じのとおり、神は以前にあなたがたの中から私をお選びになり、異邦人が私の口から福音のことばを聞いて信じるようにされました。そして、人の心をご存じである神は、私たちに与えられたのと同じように、異邦人にも聖霊を与えて、彼らのために証しをされました。私たちと彼らの間に何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのです。」

血筋も、アブラハムの子孫ではない、また割礼も受けていない異邦人であっても、そのような上辺ではなく、神は心を見てくださるということを知っていれば、異邦人が異邦人のままでも救われることが分かるはずです。ダビデが王に選ばれた時、彼はまだ少年でしたが、8 番目の末の子でした。預言者サムエルが油を注ぐために、父エッサイの家に行った時、エリアブという兄息子を見た時に、サムエルは、きっと彼が主に油注がれるものだと思います。けれども、主はこう言われるのです。「I サム 16:7 彼の容貌や背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人を見

るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。」

私たちは、絶えず、見た目で判断してしまいます。見た目や、表面に見えることに反応するのは仕方がないことです。そして、それは人間に与えられた大事な体の機制です。お年寄りが電車の中で立っていて、その方がお年寄りだと判断するのは、もちろん見た目です。その方がどう思っているかに関わらず、席を譲ろうと思います。ですから、見た目で反応することは悪いことではありません。けれども、見た目によってその人の価値を決めたり、行動を公平に見られないのであれば、問題です。キリスト者は、たとえ見目で反応しても、主の命令にしたがって応答しないとイケません。反応しても、応答は神からの命令です。

そこで、心が清められるのは、どうすればよいのでしょうか？ペテロがここで言っているとおりです、福音のことばを信じることによってです。福音の言葉を信じることによって、御霊が働いて、心も思いを新たにしてください。「テトス 3:5-6 神は、私たちが行った義のわざによってではなく、ご自分のあわれみによって、聖霊による再生と刷新の洗いをもって、私たちを救ってくださいました。神はこの聖霊を、私たちの救い主イエス・キリストによって、私たちに豊かに注いでくださったのです。」このことにおいては、ユダヤ人も異邦人も差別なく与えられるものなのです。

このことは、割礼をさせなさいと命じられた主ご自身が、肉の割礼はあくまでも、心が清められることを表す印にしか過ぎないことを教えておられます。「申 10:16 あなたがたは心の包皮に割礼を施しなさい。もう、うなじを固くする者であってはならない。」男性の性器の一部である肉の包皮ではなく、心の包皮の割礼を施しなさいと命じておられるのです。

### 3C 悔い改めによる救い

それで、バプテスマのヨハネは、ユダヤ人たちが神のことばを聞きに彼のところにやってきた時に、悔い改めを説いたのです。アブラハムの子孫だからと言って、救われると思っはいけない。むしろ、これだけ強く説いています。「ルカ 3:7 まむしの子孫たち。だれが、迫り来る怒りを逃れるようにと教えたのか。それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。」もし、まむしのように毒を人に与えるようなことをやったり、言ったりしていたら、自分はアブラハムの子ではなく、まむしの子なのだということです。同じように主は、自分はアブラハムの子孫だと誇っていたユダヤ人に対して、「ヨハ 8:39b-40a あなたがたがアブラハムの子どもなら、アブラハムのわざを行うはずで。ところが今あなたがたは、神から聞いた真理をあなたがたに語った者であるわたしを、殺そうとしています。」殺意を抱いているのであれば、神を父としているのではなく、悪魔を父としているとも言われました。

同じように、私たちが神の子どもであるなら、神を父として真似をし、神に倣う者だということですね。このことを度外視してしまうのなら、他のこと、例えば過去に洗礼を受けたとか、教会に属して

いるとか、時々、祈っているからとか、救いの根拠にはならないことに信頼してしまっていることを示しています。

### 3B 差別なき救いと一致

ですから、私たちは、ユダヤ人であっても、異邦人であっても、全く差別なく、イエス・キリストを信じる信仰によって救われます。それゆえに、私たちはキリストにあって一つなのです。「ガラ 3:28 ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。」キリストにあって一つです。ただ、キリストによって救われたという事実だけで、私たちは互いを兄弟と呼び、姉妹と呼ぶことができます。全く話が通じない、遠くの国の人でイエス様を信じている人と持っているつながりよりも、次元の異なる一体感があるのです。

### 2A 受け入れる神 35

次にペテロは、「<sup>35</sup> **どこの国の人であっても、神を恐れ、正義を行う人は、神に受け入れられます。**」と言いました。どこの国の人であっても、神に受け入れられます。

### 1B 壁を作る人間

#### 1C 神との交わりのための戒め

神は、私たちが聖別したと言われます。聖別、聖潔、あるいは聖めというのは、別たれるという意味です。いろいろなものがある中から別けられて、何かの意図のためだけに用いるということです。数多くいる人たちの中から自分が別たれて、神のものにされたという時に、聖別されたということです。そこで、私たちも聖別された生活を歩むことを教えられています。「Ⅱコリ 6:16b-18 わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。17 それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らから離れよ。——主は言われる——汚れたものに触れてはならない。そうすればわたしは、あなたがたを受け入れ、18 わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる。——全能の主は言われる。』

#### 2C 自分の守りのための枠組み

けれども、これはあくまでも、聖なる神と交わりをするためのものであって、自分の体が聖霊の宮だからこそ離れることです。神との交わりに妨げになるので、離れるのです。

ところが、これまで見てきたように、いつのまにか神との交わりが、自分を守るために壁を作ることに代わっていきます。パリサイ人が、分離することが目的になって、結局、自己義認に陥ってしまいました。そこには神の前でのへりくだりがありません。神との交わりがありません。放蕩息子の話の兄のように、父に怒って家から離れてしまうような、本末転倒が起こります。物理的には父と一緒にいたのですが、心が父から離れていたのです。私たちが、何をもって自分を守っているで

しょうか？その自分の守る壁が、時のユダヤ人と同じように、神のものを利用しているかもしれません。律法を彼らは利用していましたが、神のものを自分を守るために使ってしまいます。

## 2B 壁を壊されたイエス

しかし、イエス様は、罪人たちと食事をされました。そこで、自分が汚れたのでしょうか？いいえ、父なる神との交わりにある聖さと命が流れ出て、その罪人たちに悔い改めをもたらしたのです。ザアカイが、その典型ですね。そしてイエス様は、サマリアの女にも近づかれました。前回も話しましたが、サマリア人とユダヤ人は不仲であり、しかも、ラビである男性が、女に話しかけるのもタブーです。さらに、この女は五人の男と付き合っ、今は結婚さえもしていないという、ふしだらな女だったのです。そして、福音書には、ローマの百人隊長のしもべをイエス様が癒されたこと、そしてカナンの女で娘が悪霊につかれているけれども、イエス様が追い出されたことが書かれています。

主は壁を次々と壊されて生きました。そこには勇気が要ります。午後、ペテロがコルネリウスの家に入る場面が出てきますが、これまでのユダヤ教のしきたりをすべて破るような行為です。勇気が要ったことでしょう。けれども、ただ主が命じられただけという理由で行いました。イエス様の行われた壁を壊す働きに、ペテロも自分の心にある壁を壊しながら従ったのです。

興味深いことに、牧者チャック・スミスの注解を見ている中で、興味深い話が出てきました。実は私たちの教会の方にも、同じ体験をされた方がいます。ある婦人が、バプテスマを受ける前に、「私は一度も、水の中に潜ったことがないのです。一生に一度もないのです。けれども、今、バプテスマを受けるのは、ただイエス様が命じられたからという理由だけです。」私たちの教会にもおられますね！主が言われているからという理由だけで行う時に、聖霊が力強く働いてくださいます。

## 3B 神への畏れ、義の行い

そして、「**神を恐れ、正義を行う人は、神に受け入れられます**」とペテロは行っています。信仰を持ち、御霊に導かれる人は、キリストの正義を行います。自分の義ではなく、キリストが自分を通して正義を行ってくださるのです。その時、神に受け入れられているというのです。ここに差別がないのです。

私がアメリカに行って、大革命が心で起こりました。チャックが説教壇からこう語ったのです。「神にとって、私が大事だと思っているのと同じように、神にとってみなさんは大事だ。」どういうことかと言いますと、私はチャックは神に近い人だと思っていました。自分はそれに比べたら、神からとても距離があると思いました。チャックがイエス様に本当に近しくしているように見えるからです。けれども、同じようにイエス様が自分に近いということを教えてくれたのです！つまり、チャックではない、イエス様なのだ！と分かりました。神は、この私をどんなに重要に見えるような人々と変わりなく、大切に見ておられます。受け入れておられます。

1C 罪人との壁

2C サマリア人との壁

3C 異邦人との壁

4C 神殿の壁(十字架の死)